斉藤　日出治

グローバル資本主義の精神分析

貨幣欲望と死の欲動

はじめに

グローバル資本の運動はいまや人類と地球を破局の危機へと招いている。私的利益を求めて世界を駆け巡るマネー・フロー、越境するひとびとの移動、商品の生産・流通・消費のトランスナショナルな流れは、自由、平等、民主主義、平和といった公式の理念を普及させるどころか、支配と抑圧、不平等と格差、戦争と暴力をひたすら増幅させる。ひとびとの不満や怨恨や憎悪を募らせ、たがいの競争心と敵対関係をあおり立て、社会を混乱に陥れる。そして、ついには「グローバリズムの終焉」「反グローバリズム」の声がグローバリゼーションを推進する勢力から発せられ、国家へと退行する動きが加速している。しかし、この動きはグローバリゼーションを乗り越えるものではない。それはむしろグローバリゼーションの矛盾を深化させる。国家間、地域間、国家と地域の間の紛争が激化し、冷戦時代が直面した核戦争の脅威が再来している。

経済学はこのグローバル資本主義が招いた破局的な危機を認識する概念装置をもたない。経済学は基本的に希少性、計算合理性、効率性という規範にもとづき、市場取引を通して財やサービスの効率的配分を考察する言説だからである。この言説の根源に破局を招く無意識の欲動がはらんでいることを洞察したのは経済学ではなく、精神分析である。本論はフロイトの〈死の欲動〉という概念装置を手がかりにして、グローバル資本主義の破局的危機の発生源を探ろうとするこころみである[1]。

一　破局を内蔵するグローバル資本主義

まず、グローバリゼーションの諸相にはらまれる破局的危機の動きを概観したい。

1　市場のグローバリゼーションと破局的危機

国境を越えた自由な市場取引は、富を地球全域にゆきわたらせるどころか、富を特定の富裕層、特定の地域、特定の国に偏在させた。市場のグローバリゼーションが格差と不平等をいちじるしく押し広げたことについては、トマ・ピケティ［2013］、ブランコ・ミラノヴィッチ［2016］らが統計データにもとづいてあきらかにしている。たとえば、ピケティは一九八七―二〇〇三年のあいだに総資産一〇億ドル以上を保有する億万長者が一四〇人から一四〇〇人に増加し、その総資産額も三〇〇〇億ドルから五兆四〇〇〇億ドルに伸びたことを指摘している。二〇一六年の日本のGDPが五兆ドルだから、この資産額の巨大さがうかがえる。

だが市場のグローバリゼーションは階層間・地域間・国家間の格差をもたらしただけではない。グローバル市場の内部には、ひとびとの暮らしを支える基盤そのものを解体する破壊力が秘められている。

ウルリッヒ・ベック［1986］は、リスク社会論の提唱を通して、市場がはらむこの破壊力を洞察した。ベックにとって、リスクとは自然災害のように社会の外部からもたらされるものではなく、社会的・経済的制度や科学技術によってもたらされるものである。しかも、このリスク社会では、社会や科学技術が生み出すリスクに集団で対処する能力が衰退していき、そのリスクの重圧がひとりひとりの個人にストレートにのしかかる。

なぜリスクは個人にストレートにのしかかるのか。市場取引が支配する社会では、ひとびとが市場取引の私的な担い手（生産者、労働者、消費者）にされることによって、市場の外でのひとびとの協働と連帯の結びつきが解体され、諸個人がたがいに分断されていくからである。そのため、市場が生み出すリスクに集団で対処する能力がしだいに衰弱し、そのリスクが個人にストレートにのしかかるようになる。化石燃料の大量消費がもたらす地球の温暖化、原子力発電事故による放射能汚染、金融危機がもたらす信用収縮、雇用不安、資産・所得の格差にともなう貧困の蔓延、ベックはこのようなグローバルなリスク現象が、制度的なセーフティネットを欠いたまま個人に直接のしかかる傾向に注目し、これを「リスクの個人化」と呼ぶ。

リスクの個人化は、ひとびとの暮らしが市場によって組織されることに起因している、とベックは言う。

「個人化は、人間が人生を営む上で、あらゆる次元において市場に依存するということを意味する。成立しつつある存在形態は、規格化された住居・住宅設備・日用品や、マスメディアを通じて送り出され採用される意見・習慣・態度・ライフスタイル等のための大量市場と大量消費である。そこでは個々人はばらばらにされ、自分自身のことを意識しなくなる。還元すると、個人化は、外部による制御と標準化を人間に押しつける」

(Beck U.[1986] 邦訳二六一頁)。

リスクの個人化は、ひとびとが連帯や協同にもとづいてたがいにつながりあう諸組織・諸制度を解体し、社会を市場に委ねた結果生み出されたものである。グローバル資本主義は、ひとびとの社会諸関係を解体し市場という物象の関係によって地球の全域の相互依存を強めるから、ひとたび危機が発生するとそのリスクが国境を越えて個人にストレートに襲いかかる。グローバリゼーションの社会とは、ひとびとが裸の個人のままで無防備にこのリスクにさらされるグローバル・リスク社会なのである。

経済学はこれらのリスクを市場取引が随伴するマイナスの効果とみなし、これを「市場の外部効果」として位置づけようとする。だが、これらのリスクは、市場の外部効果などではなく、市場の内部から発する暴力にほかならない。

市場が社会全体を支配するような経済システムには、ひとびとの共同生活にもとづく暮らしを破壊する暴力が内蔵されている。市場経済システムのこの本性を洞察した経済学者がカール・ポランニー[1944]であった。ポランニーは、市場の価格変動を通して需要と供給を調整する仕組みが社会の全領域に浸透する社会を「市場社会」と呼び、この市場社会が出現するためには、ひとびとの共同と相互扶助にもとづく社会を解体して、ひとびとがたがいに分断され、私的個人として労働市場、消費市場にたちあらわれることが必要だと言うことを見て取る。そのために、イギリスのような産業資本主義の本国では貧困に陥ったときひとびとを救済する救貧法などを廃止し、植民地ではひとびとの暮らしを支える共同体を解体するという暴力が行使される。ポランニーは人類学者の表現を借りてこの暴力を「文化的破壊」と呼んだ。二〇世紀末以降急進展する市場のグローバリゼーションの過程では、いわゆる先進工業諸国だけでなく、新興工業諸国も巻き込んでこの「文化的破壊」の過程が地球的規模で進行する。

このグローバルな文化的破壊の過程は、地球的な規模における市場の連鎖を通してリスクの波及効果を高める。市場のグローバリゼーションとは、生産・流通・消費のグローバルな市場のネットワークの構築を意味する。そして、地球上のひとびとがこのネットワークに依存して暮らすことになる。それゆえ、このネットワークがさまざまな事情によって切断されたとき、その危機の波及効果は地球的な規模に及ぶ。金融危機、食糧危機、原料危機、エネルギー危機など、今日の暮らしは一地域の危機が地球全体のひとびとにリスクを波及させるようなかたちで成り立っているのである。

2　貨幣と金融のグローバリゼーションの破局的危機
――世界金融危機

二〇〇八年のリーマン・ショックは、米国金融市場の危機が全世界に波及したグローバル・リスクの典型例であった。米国の金融機関は、だぶついた資金の投資先を見いだすために、低所得者向けの住宅建設ブームを引き起こして、低所得者層に住宅ローンを組ませる。だがこの住宅ローンはリスクが高いため、そのリスクを転売するための債務担保証券を発行する。こうして、ハイリスクの債務担保証券という金融派生商品が世界の金融市場で大量に取引されるようになる。やがて住宅価格の下落とともに、これらの証券が不良債権化するが、債務担保証券は複雑に組み合わされてハイリスクの証券の所在がわからなくなる。そのため、金融機関はたがいに疑心暗鬼になり、大量の遊休資金を抱えたまま貸し出しを拒むようになる。これが世界の信用収縮（クレジット・クランチ）を引き起こした。

この世界金融恐慌の背景にあるのは、一九七〇年代以降の、ドルを金とリンクさせた戦後国際通貨体制＝ドル本位制度の動揺と金融の自由化の流れであった。それ以降、投機を目的として金融派生商品取引が膨張し、世界の資産バブル現象を引き起こす。世界の金融市場が、この金融派生商品市場によってネットワーク化し、投機を目的としたグローバルなマネー・フローが築き上げられる。そして、製造業を初めとする実体経済の生産資本循環がこのグローバルなマネー・フローによって支えられるという不安定な構造が生み出される。世界各国から米国の金融市場めがけてマネーフローが集中し、米国に集中した資金が消費購買力の源泉となって新興工業諸国の工業製品が米国に向けて輸出されるという資金循環フローと生産資本循環フローの構造が編成される。

そして、リーマン・ショックはこの流れを断ち切った。この切断のリスクは証券化商品の取引とはまったく無縁なひとびとに、つまり中小企業の経営者、消費者、労働者に襲いかかる。「リスクの個人化」とはまさにこの事態を物語っている。そして、社会はそのリスクの破壊力に抗する方策を断たれる。

リーマン・ショックのあとも、同じようにして金融派生商品取引は増加の一途を辿り、個人の金融資産は増え続けている。日本における個人の金融資産は、二〇〇八年の一五〇〇兆円から二〇一六年に一八〇〇兆円にまでふくらんだ。労働者の賃金が伸び悩む一方で、個人の金融資産が膨張し続けていることは、富裕層が証券取引、不動産取引などを通して不労所得を着実に増やしていることを物語っている。

3　グローバリゼーション時代における国家の暴力
――「新しい戦争」

このグローバルな資本の運動が世界各地にもたらす不平等と

格差、社会的・文化的破局、無秩序と混乱が深化する中で、主権国家が新しい戦争と暴力を発動するようになる。

それはなぜか。市場のグローバリゼーションが主権国家によって編成された国際秩序を揺るがし、国境の仕切り、あるいは国家と非国家との関係を不分明にしたためである。

西欧が創り出した近代世界は、長期にわたり主権国家によって組織されてきた。そこでは国家が社会のあらゆる主権を独占した。そのために社会は国家によって枠づけられ、国民国家として組織された。主権を奪われた非西欧地帯の社会は、主権を有する欧米諸国および日本の植民地として統治された。主権国家の外部の国際秩序は、主権国家間の関係によって、つまり国家間の外交政治によって基本的に維持されたのである。このような国際秩序が出現したのは、一六四八年のウェストファリア条約以降のことであったため、この国際秩序はウェストファリア体制と呼ばれてきた。

だが、グローバル資本主義はこのような国際秩序を揺るがすようになる。国境を越えたグローバルな市場の連鎖、貨幣と金融のネットワークは、地球的な規模でのひとびとの怨念や敵対、競争と退行の関係を増幅させ、感染させる。

二〇一一年九月一一日に米国で起きた「同時多発テロ」事件は、国境を越えた社会の混乱がもたらした暴力であった。世界における極端な不平等、貧困、飢えにあえぐひとびとが富の集中する米国に向けて攻撃を仕掛ける。金融派生商品の世界的取引の象徴である貿易センタービルと、世界の軍事的支配の象徴である国防総省が攻撃の的になったのはそのためである。だが、この攻撃を仕掛けたのは、主権国家ではなかった。それはアルカイーダといわれる国際テロ組織であった。非国家集団のこのような暴力に対しては、法の秩序にもとづいた犯罪行為として対処するのが近代法の原理である。国際法の下では、国際犯罪法を整備し国際協定を制定して暴力の国際的波及を阻止するという対応策が求められた。だが、非国家集団が米国の主権国家に向けて行使したこの攻撃は、法を侵犯する犯罪としてではなく、「戦争」として受け止められた。当時の米国大統領のジョージ・ウォーカー・ブッシュは、「これは戦争だ！」と叫んで、米国民の憎悪と愛国心をかき立て、その国民感情を他国の主権国家にぶつける。つまり非国家団体の暴力を国家間戦争へと変換し、アフガニスタンとイラクを敵国とみなして軍事攻撃を敢行した。アフガニスタンとイラクは米国を軍事攻撃したわけではない。米国政府は、アフガニスタンがアルカイーダを擁護する政権であり、イラクが大量破壊兵器を保有する政権だ、ということを口実にして二つの主権国家に対する軍事攻撃を行使した。これはあきらかに国際法の原則を侵犯する行為にほかならない。

この動きは主権国家が戦争を独占することによって成り立っ

ていたウエストファリア秩序が動揺する中で、この動揺する世界秩序を主権国家の枠組みに強引に押し戻そうとするこころみにほかならない。国際法の原則に反した主権国家による強硬な武力行使は、ポスト・ウエストファリア体制と言える状況の中で行使されたのである。

だが、グローバリゼーションの時代は、もはや主権国家の調整力を逸脱して進展している。国家の戦争と非国家組織の暴力とが融合し、社会を破壊する危機を増幅している。東欧、中東、アフリカなど主権国家が弱体化している地域では、非国家組織の暴力と国家の軍事活動はとりわけ区別がつきにくくなっている。市場のグローバリゼーションは、ひとびとの伝統的な生活を破壊し、既存の集団を解体して、それらの集団を貧困と悲惨な状態に追いやる。それらの集団が打ち砕かれた集団的アイデンティティを再建し、その憎悪を他の集団に振り向ける。このような非国家集団相互の暴力と人権侵害や犯罪行為と、国家による正規の戦争とが入り交じって区別がつかなくなる。メアリー・カルドーはこのような状態を「新しい戦争」、「ポストモダン戦争」と呼ぶ[2]。

グローバリゼーション時代の国家の戦争は、主権国家による国際秩序（ウエストファリア体制）が動揺する中で、主権国家と非国家集団が入り乱れて戦争のリスクを高め、社会に向けて発動する破局的暴力としての様相をますます強めている。

4　破局の生産装置としてのグローバル資本主義

破局的危機はグローバル市場の発展に随伴する副次的な現象であったり、グローバル市場の発展の帰結として生ずるだけではない。グローバル資本は、破局的危機を意図的に創出することにより、この危機を契機として経済成長を推進しようとする。このグローバル資本の策動を解明したのが、ナオミ・クライン［2007］である。クラインは、拷問実験室で被験者の身体を電気ショック、薬物投与、強制睡眠などの方法で痛めつけ、その被験者から記憶を消去し、脳を白紙の状態に還元する精神医療実験を紹介しながら、新自由主義の経済政策が同じようにして、クーデタ、戦争、社会危機を作為的に創造し、あるいは津波や洪水などの災害を利用して、社会を混乱状態に陥れ、社会を白紙状態に還元したうえで、そこに多くのビジネスチャンスを創り出そうとする動きを「ショック・ドクトリン」と呼ぶ。一九七三年にチリのピノチェト将軍がアジェンデ社会主義政権を軍事クーデタで打ち倒した。このクーデタはその背後で米国のＣＩＡや多国籍企業に後押しされていたと言われている。そしてこのクーデタの後、シカゴ学派を代表する経済学者ミルトン・フリードマンがチリの若い研究者を率いてチリに乗り込み、社会保障費の削減、国営企業の民営化、輸入関税の一括引き下げ、輸入制限の撤廃といった新自由主義的な政策を一挙に打ち出し、外国企業、とりわけ米国資本のための投資機会を提供し

た。

軍事クーデタだけではない。自然災害が発生したときに、その災害の危機を利用して資本が投資活動に乗り出す動きが、グローバリゼーションの時代とともに加速する。クラインは「壊滅的な出来事が発生した直後、災害処理をまたとない市場チャンスととらえ、公共領域にいっせいに群がるこのような襲撃的行為」（[2007] 邦訳上、五―六頁）を仕掛ける資本主義を「惨事便乗型資本主義」（同、六頁）と呼んだ。

このような「惨事便乗型資本主義」は、企業と政府が提携してこのビジネスチャンスを創出するための法的・政策的な整備を推進する。民営化、金融取引・労働市場の規制緩和などに向けた法的整備や経済政策がそれである。それは「新しいコーポラティズム」（ナオミ・クライン）と命名されている。「新しいコーポラティズム」と言えば、戦前のファシズムを生み出した国家コーポラティズムと区別して、第二次大戦後に出現した組織資本主義の謂いであった。需要と供給を市場の価格変動によって自動調整する資本主義ではなく、需要と供給を諸種の制度（労使間の団体交渉、金融通貨制度、労働基準法、最低賃金制度、福祉国家、国際通貨体制）によって事前に調整する組織された資本主義が「新しいコーポラティズム」と呼ばれていたのである。ところが、この新手の「新しいコーポラティズム」は、その逆に組織資本主義の諸種の制度を解体し、規制を緩和することによって、市場の競争活力を無放縦に解き放ち、そのエネルギーによって成長を刺激しようとする。こうして、破局と暴力を内蔵する資本主義が政治的に組織されることになる。

二　グローバル資本主義と死の欲動

グローバル資本主義は、このようにしてその内部に破壊的暴力を内蔵し、その暴力をてこにして発展を遂げる。この発展は、いまや人類と地球を消滅させるほどの脅威にまで至っている。ひとびとは世界が終わるかもしれない、という破局の危機を目の当たりにしながら、その恐怖におののきつつ、それでもなおその危機に向かって突進しようとする。グローバル資本主義の経済活動がはらむこのような破壊と暴力の衝動をいったいどのように了解したらよいのであろうか。

このようなグローバル資本主義の動態を精神分析の次元から説き起こそうとしたのが、ドスタレールG．とマリスB．の『資本主義と死の欲動』である。ふたりは、精神分析における無意識の欲動の概念を駆使して、グローバル資本主義の経済活動を解き明かそうとする。

フロイトは人間の生活が快原理によって支配されているとして精神分析を進めた。「心の出来事はいつでも、…不快を回避し快を産出するように、舵取られ経過してゆく」（「快原理の彼

岸」邦訳五五頁）傾向にある。しかし、快の産出はいつも満足のいくかたちで実現されるわけではなく、外的な環境に制約されて、ときに自己を保存することと対立することがある。その場合には、快の満足を一時断念してそれを迂回させようとする。これをフロイトは「現実原理」と呼ぶ。

「現実原理は、最終的に快を獲得するという意図を放棄することはないが、しかし、満足を延期したり、満足のいろいろある可能性を断念したり、快に至る長い回り道の途上でしばしの間不快に耐えたり、といったことを要求し、また貫徹させるのである」（同、五八頁）。

だが、ひとは外的な危険に対して、この現実原理では説明のつかない心の反応を示す。事故や戦争で生命の危険にさらされたひとが陥る「外傷性神経症」患者の場合、自我に不快をもたらすものが反復して体験される。患者は「抑圧されたものを過去の一部分として想起するのではなく、現在の体験として反復するよう、余儀なくされる」（同、六八―六九頁）。

この「反復強迫」（同、六九頁）の体験は、自我の快原理によっても、現実原理によっても説明のつかないものである。

フロイトは、さらに一歳半の幼児が糸巻きをベッドの下に放り投げてそれが見えなくなってから糸を引っ張ってたぐり寄せる、いわゆる「いないいないごっこ」遊びをすることに着目する。幼児はおもちゃが見えなくなる状況をわざとつくりだし、見えなくなったおもちゃが再び現われることで歓喜の声を上げる。それは、欲動を断念する状況をみずからが創り出し、その再来を歓迎するという「消滅と再来の遊び」（同、六四頁）である。この遊びは、母親がいなくなるという自分にとって一番大切なものが消滅するという苦痛の体験を遊びとして反復することだ、とフロイトは言う。そしてこの苦痛の体験を反復することは、快原理では説明がつかない。

「子供がこの自分にとって苦痛な体験を遊びの劇として反復することは、どのようにして快原理とつじつまが合うのだろうか」（同、六五頁）。

こうして、フロイトは外傷性神経症患者や幼児の「いないいないごっこ」の遊びにおける反復強迫を「快原理以上に、根源的で、基本的で、欲動的なもの」（同、七四頁）と位置づけ、これを〈死の欲動〉と呼ぶ。

フロイトによれば、この反復強迫は、人間がみずからの生命が出現する以前の状態に回帰しようとする欲動から発している。

このようにして、フロイトは、生を活性化し生をたえず更新しようとする〈生の欲動〉に対して、生以前の状態に、つまり無機物に回帰しようとする欲動を発見する。

そして、この自己の内側から発生し自己の生命の発生以前の状態に立ち戻ろうとする〈死の欲動〉が、〈生の欲動〉の中に入り込むとき、それは他者や外部への攻撃的欲動となって発現

する。自己の内部からわき起こってくる、無機物に帰ろうとする〈死の欲動〉は、〈生の欲動〉の回路を通して他者への攻撃欲動へと転ずるのである。

つまり、〈生の欲動〉の中にはつねに〈死の欲動〉が潜んでいる。〈生の欲動〉に突き動かされて他者と関係しようとするとき、そこには〈死の欲動〉が同時に作用するのである。他者を愛するという関わりのなかに、すでに他者を憎悪するという欲動が不可分なかたちではらまれている。それゆえ、人間は自己および他者に対する攻撃という本源的な性向を有している。

「人間には生まれつき『悪』への性向、攻撃と破壊に向かう、それゆえまた残酷性に向かう性向が備わっている」（「文化の中の居心地悪さ」邦訳一三二頁）。

この二つの欲動の対抗関係は、もっとも親密な人間関係のなかでも働いている。

「人間とは、誰からも愛されることを求める温和な生き物などではなく、生まれ持った欲動の相当部分が攻撃傾向だと見て間違いない存在なのだ。そのために、人にとって隣人とは、ときに助っ人や性的対象ともなる存在であるだけではなく、こちらの攻撃性を満足させるように誘惑する存在でもある。隣人を見ると、人はつい見返りもなしにその労働力を搾取し、同意を得ぬまま性的に利用する、その所有物を奪い取り、侮辱し、苦痛を与え、虐待し、殺したくなるのである」（同、邦訳一二二頁）。

人間はこの〈生の欲動〉を通して発動される〈死の欲動〉の攻撃的暴力を制圧するために文化を築き上げる。だが、この文化が〈生の欲動〉による〈死の欲動〉の制圧によって保持されるという保証はない。その逆に、〈死の欲動〉が生の欲動を圧倒することもありうる。フロイトはこの危うさを「文化の中の居心地悪さ」の末尾でつぎのように論ずる。

「人間の共同生活は、人間自身の攻撃欲動や自己破壊活動によって撹乱されている。人類は、これを自らの文化の発展によって抑制できるのか。どの程度までそれが可能なのか。私には、その成否が人間という種の運命を左右する懸案ではないかと思われる」（同、邦訳一六二頁）。

なぜ攻撃欲動は「人間という種の運命を左右する」ことになるのか。それは人間の攻撃欲動が人類を絶滅させるほどの水準に達しているからだ、とフロイトは言う。フロイトの時代には、すでに大量虐殺兵器が開発され、強制収容所がつくられていた。現在では、当時のフロイトが知らなかった核兵器、遺伝子工学、金融工学などの技術によって、人類の攻撃欲動を充足する装置はさらに巨大なものになっている。

だから、とフロイトは言う。〈生の欲動＝エロス〉に頑張ってもらって〈死の欲動＝タナトス〉を制御してもらわなければならない。だが、この両者のどちらが勝つか、「その成否や結

末はいったい誰に予見できよう」（同、邦訳一六二頁）。フロイトはこの最後の一文を一九三一年にこの論文の第二版で付け加えた。ナチスの台頭が明らかになりつつある状況を見据えながら、この文言が追記されたのである。

〈生の欲動〉が外的環境の条件によって快原理を充足することができずに現実原理へと迂回させられるように、死の欲動も文化によってその発現を押さえ込まれ迂回させられる。〈生の欲動〉は、この〈死の欲動〉をエネルギーにしてそれを他者への攻撃や自然への攻撃に振り向ける。経済の発展や技術進歩とは、〈生の欲動〉による〈死の欲動〉の迂回された回路にほかならない。

この〈生の欲動〉と〈死の欲動〉、快原理と現実原理というフロイトの方法概念を駆使して、資本主義の経済活動を読み解くとどうなるであろうか。

資本の蓄積は、経済主体の節欲と貯蓄を通して推進される。節欲と貯蓄とは、現在の快の追求を控えて快の実現を先送りし、迂回させることを意味する。資本の蓄積過程とは、生み出された剰余価値を個人的に消費する代わりに、追加的生産手段と追加的労働力の購入に回す活動であり、それは快原理の現実原理への変換の行為を意味する。だが、この活動は、同時に〈生の欲動〉による〈死の欲動〉のエネルギーの利用であり、死の欲動の発現を先送りする過程でもある。それは〈死の欲動〉を消滅させることを意味しない。むしろその逆に、〈死の欲動〉を迂回させることによって内部にそのエネルギーをため込み、将来、さらに強大なエネルギーをもって〈死の欲動〉を発現させるリスクを高めていく過程となる。投資活動の進展、技術と生産の革新が自然の破壊を促し、原子力発電の重大事故を発生させるのは、このような内に蓄えられた〈死の欲動〉のエネルギーの炸裂にほかならない。

「死の欲動は生を破壊するという目的を追求する。だがその目的は、生の欲動によってたえず遅らされ、その目的の追求を通して迂回させられる。迂回がしだいに大規模になる、経済における生産のこの迂回は、資本蓄積という形態をとる。生産の迂回が引き延ばされれば引き延ばされるほど、最終的生産に到達する時間はますます長くなり、生産過程において経過する時間はますます重要になり、市場と消費から排除されて蓄積に参加する人と機械の数はますます多くなり、蓄積はますます強まる」（Dostaler G./Maris B.[2009].p.36. 邦訳四九－五〇頁）。

投資活動とは、直接的消費を控えて将来より多くの消費をするために消費行為を延期する活動であるが、その活動が同時に現在の直接的破壊を将来に延期させて、より大規模な破壊を用意する過程となるのである。

「投資は、直接的破壊を断念し、つまり消費を断念し、行為を延期することによってより多くの消費を可能にする。それは

まさしく、より多くの将来の破壊のために現在の破壊を延期することである。それは、もっと後になってより巨大な力でもって死の欲動を表現するために、今日における死の欲動を制限することなのである」(ibid.,p.34.)

文化は〈死の欲動〉を完全に制御することはできない。文化にできることは〈死の欲動〉を〈生の欲動〉に変換して回路づけ、〈死の欲動〉の暴発を延期させることだけである。このようにして〈生の欲動〉のうちに累積された〈死の欲動〉は増幅し、やがて巨大なエネルギーとなって放出される。

資本主義はそれゆえ破壊をその精神としている。〈生の欲動〉によってそのエネルギーを「創造的破壊」(シュムペーター)へと変換するとしても、である。それは人類を死へと誘導する巨大な装置である。

「タビネズミが押し合いへし合いして、断崖絶壁の高みから飛び降りるのと同様に、あるいはトナカイが荒れ狂う河に一団となって身を投げるように、人類はみずからをせき立てて、無意識のうちに死へと向かいつつあるのではないか。そこには巨大な享楽が、あるいは少なくとも巨大な安らぎを求める欲望がともなっているのではないか」(ibid.,p.13. 邦訳一七-一八頁)。

三　肛門性愛と死の欲動

〈生の欲動〉のなかに〈死の欲動〉が忍び込み〈生の欲動〉とともに〈死の欲動〉のエネルギーが増幅していくのはなぜか。人間が死を受容せずに、死を拒絶するためである。動物は生を受容するのと同じようにして、死を受容する。これに対して、人間は死を回避しようとする。

〈死の欲動〉から生ずる「反復強迫」は、死を逃れようとする衝動によって目新しいものを求める行動へと転移させられる。目新しいものを探求することは、それ自体が恒常性から逃れようとする抑圧神経症の症状である。だがそれは死を回避しようとする欲動が転移されたものであるから、目新しいものの追求はふたたび「反復強迫」をもたらす。

「目新しさの追究の無意識の目的は反復なのである」(Brown N.[1959] 邦訳一〇一頁)。

「反復強迫」とは、死を拒絶して永遠の生命を求めようとすることである。宗教はこの「反復強迫」の産物である。フロイトにとって、宗教は死から逃れることができるという錯覚が生み出したものにほかならない。人間は子供のころに寄る辺なき非力で無力な存在であるという恐怖の印象を抱く。この非力で無力だという感情を振り払おうとして保護の欲求が生ずる。この保護を求める強迫神経症的な欲求が動機となって、宗教とい

う錯覚が生み出される。

動物は死を回避しようとしないから、そのような欲求を持たないがゆえに、抑圧の神経症に陥ることはないし、宗教をもつこともない。

「人間を動物から区別するものは死の意識ではなく、死からの逃走である。骨を赤く染めて家族の炉辺の傍に埋めた原始の穴居人の時代からハリウッドの葬儀祭典に至るまで、死からの逃避は…全宗教の中心であった」（Brown N.[1959] 邦訳一一〇頁）。

死から逃避するために、「反復強迫」をひたすら追求し、反復強迫のなかに快楽を感じ、そこに快原理を見いだすようになる。そうなると、〈生の欲動〉が〈死の欲動〉にとらわれる。

この〈死の欲動〉にとらわれた〈生の欲動〉が姿をあらわすのが、肛門と排泄物に対する人間の性癖である。

フロイトは、幼児期における肛門性愛について論ずるなかで、肛門から排出される排泄物が幼児にとって有する多義的な象徴的意味に着目する。腸を通って体外に排出される糞便は、幼児にとって自分の子どもという創造的な意味を、他者への贈り物という他者への愛の意味を、自分にとっての財産という他者からの独立という意味を、さらには他者を攻撃する武器としての意味をはらむ。糞便は金銭、贈り物、子ども、ペニス、武器と結びついた多義的な象徴性を帯びている。生まれてくる赤ん坊は、腸を通って大便と同じようにして体から分離されるものとして表象される。大便は赤ん坊が愛する両親に捧げる最初の贈り物であり、赤ん坊の一部としてみなされる。大腸をくぐって出てくる棒状の糞便はペニスと同一視される。糞便に対する関心は、贈り物に対する関心へと移り、やがて金銭に対する関心へと移行する[3]。

排泄物に対するこの性癖は、成人になると消え去るが、その性癖は「几帳面、倹約、強情」（「性格と肛門性愛」邦訳二七九頁）といった性格となって昇華される。そしてこの昇華された性格を通して、幼児期における肛門性愛に潜む人間の無意識の欲動、つまり〈死の欲動〉にとらわれた〈生の欲動〉が保持されるのである。

フロイトのこの肛門性愛論に着目したノーマン・ブラウン[1959]は、肛門および排泄物への執着に現われた人間の〈死の欲動〉について、つぎのように解き明かす。なぜ、ひとは排泄物のような不潔な汚物に対する性癖を有するのか。それは死すべき肉体から排出される排泄物のうちに不死の生命力を求めようとする欲動から生じている。この性癖は「肉体を否定してそれを超越しようとする人間自身の傾向」（Brown N.[1959]、邦訳二九九頁）に起因しており、そこでは排泄物が「肉体の死んだ生命」（同頁）とみなされ、その排泄物を魔術によって浄化し不滅の生命を取り戻したいという「排泄的魔術」（同、邦

訳三〇三頁）の願望が潜んでいる。その無意識の欲動が肛門と排泄物に対する執着となって発現するのだ、と。

ノーマン・ブラウンは、一八世紀のヨーロッパで人間や動物の排泄物の蒸留が「無数の花の水」（同、邦訳三〇三頁）として売られていたというエピソードを紹介する。動物には天性の清潔愛が見られるのに、なぜ人間に不潔や汚物に対する固着が見られるのか、それは排泄物を浄化することによって死を避けられない肉体から脱して、永遠の生命を獲得したいという無意識の願望のためである。

ブラウンは、古代の贈与経済の世界においても、死を回避し永遠の肉体的生命を求めようとする願望のゆえに、葬儀において汚物が連想され、「糞尿の堆積の中を転がりまわり…身体に汚物をなすりつけ」るという慣習を紹介する。そして同じようにして、「我々は黒い服を着るのである」（ibid., 邦訳三〇四頁）、と。ブラウンはさらに人類学者がとりあげたセリ・インディアンの「糞便常食の習慣」（ibid., 邦訳三〇四頁）を紹介している。つまり、排泄物に対する性癖は、死を回避しようとする人間の無意識の欲動がもたらす抑圧神経症の症状にほかならない。そこには、人間の肉体を排泄物へと転化しこの転化によって肉体から解脱して不滅の生命を手に入れようとする欲動を、さらには地上の世界を「一つの宇宙的昇華の巨大な濾過器」（ibid., 邦訳三〇〇頁）に仕立て上げ、天上の世界へと脱出しようとする願望を見ることができる。

ブラウンは、フロイトよりも早く肛門と排泄物のうちに死を回避しようとする人間の抑圧神経症を読み取った作家としてジョナサン・スウィフトを挙げている。

スウィフトは『ガリヴァー旅行記』第四篇「フウイヌム王国渡航記」において、いかなる動物よりも排泄物に執着するヤフーという動物との出会いを描いている。

ガリヴァーは海賊に船を乗っ取られ追放され上陸した国で、縮れ毛で覆われた醜悪な動物に囲まれる。

「この呪われた種族のうちの何匹かは、背後の枝を摑んで樹に跳び上り、私の頭上に排泄物を降らせ始めた。…あたり一面に汚物が降ってくる、まさしく悶絶しそうであった」（Swift J.[1726] 邦訳二三六―二三七頁）。

「このおぞましい虫けらを両手で摑んでいるとき、こいつが黄色い液体状の排泄物を私の衣服じゅうにぶちまけてくれた」（同、邦訳二八一頁）。

このフウイヌム国では、馬が支配者で、フウイヌムという言葉を話す。馬は理性にしたがってこの国を統治する。フウイヌムは高貴で、理性的で、美徳を備えている。「彼らの大いなる座右の銘は、理性を培え、理性の統治にまかせよ」（同、邦訳二八三頁）、である。それに引き替え、ヤフーは、不潔であるだけでなく、権力欲、金銭欲、情欲、不節制、悪意、嫉妬に満

ちている。とりわけヤフーは金銭や宝石に意地汚く、それ以外のことについては無知蒙昧である。そして金銭や宝石をめぐって激しい奪い合いをする。「輝く石」をめぐるヤフーの行動についてガリヴァーはこう語る。

「この国の幾つかの野原からはヤフーどもが猛烈に好む、何色かに輝く石がとれるが、その石の一部が地中にときどき埋もれていたりすると、それを引っぱり出そうとして朝から晩まで何日でも爪で掘り出しをやって持ち帰り、小屋にうず高く隠しておくのだが、仲間にその宝を発見されやしないかと、四方八方の警戒を怠らない」（同、邦訳二七五頁）。

この輝く石をめぐってヤフーの間で「のべつまくなしに熾烈を極める戦闘が起こる」（同、邦訳二七六頁）。ヤフーのおぞましさは、「ともかく手に入るものは何でも貪り喰うあの無差別の食欲だろう」（同、邦訳二七六頁）。

このヤフーという動物は、ほかならぬ人間のことである。ガリヴァーは母国イギリスの人間像をヤフーに投影して語る。かれはフウイヌム国の馬を鏡にして、イングランドの人間像を顧みる。

フウイヌムの国では、統治者である馬だけでなく、「すべての動物は大地の産物を分けてもらう権利がある」（同、邦訳二六六頁）。これに対して、人間世界では、争い、だまし合い、奪い合いが絶えない。イングランドでは、「本来必要なものの大半を他の諸国に送り出し、それと引き替えに病気と愚行と悪徳の材料を持ち帰り、それを自分のところで消費する。そうなると、民衆のきわめて多くが物乞いに、強盗、窃盗、詐欺にポン引き、偽誓に胡麻すり、買収、偽造、賭博に嘘つき、おべんちゃら、恐喝、票売り、駄文書き、星占いに毒殺、売春、口先き説教、それから誹謗、自由思想の叩き売り等々の稼業によって生きる糧を求めるしかなくなる」（同、邦訳二六六頁）

自然の成果を平等に分かち合うフウイヌム国と、自由貿易の推進がひとびとの道徳的退廃、貧困、犯罪を強め、不平等と敵対関係を増幅するイングランドとがこうして鮮明に対比される。

さらに、ガリヴァーは、不潔で汚物に執着するヤフーが死を恐れるのに対して、フウイヌム国の馬が死を恐れずに、死を自然のこととして受容れることに注目する。

「彼らにとっての死とは、大きな事故がなければ、老衰による死があるのみで、なるたけ眼につかない場所に埋葬されるのだが、死への旅立ちとはいっても、友人、家族とも喜びや悲しみを露わにするわけではないし、死んでゆく当人も、隣人のところに出かけて帰って来るときのようなもので、いささかも未練がましいところを見せるわけではない。」（同、邦訳二九一頁）。かれらは死ぬことを「ルヌウンした」と言う。それは「原初の母のもとに帰る」（同、邦訳二九一頁）という意味で、「これからどこか遠いところに赴いて、そこで余生を送るつも

りでいると言い残すかのように、友人たちに厳粛な別れを告げるのである」（同、邦訳二九二頁）。

排泄物への執着、死に対する恐怖と死の回避の願望、金銭への執着、たがいの敵対関係の増幅というヤフーの性向を通してスウィフトが語ろうとするものこそ、〈死の欲動〉にとりつかれた〈生の欲動〉である、

死を回避し排泄物のうちに不滅の生命力を託そうとするこの願望が、〈死の欲動〉に支配された〈生の欲動〉という神経症を生み出すのである。

「死を受容しえないということは、死が、あらゆる正常な動物にとって生であると同時に死でもあるという現実から、皮肉にも人類を不可避的に追放してしまい、結果として生の否定（抑圧）となる」（Brown N.[1959]、邦訳二八八―二八九頁）。

四　肛門性愛と貨幣欲望

この肛門と排泄物に執着する〈死の欲動〉が、呪われた貨幣欲望を引き起こす。貨幣それ自体はなにかの役に立つものではなく、その意味で無価値なものである。その無価値なものを、なぜひとは最高の価値あるものとしてひたすら追い求めるのであろうか。

この問いを排泄物という無価値なものから最高の価値あるものとしての貨幣が生まれるという逆説においてとらえたのがフロイトである。

フロイトは、古代からひとびとの日常意識において貨幣が排泄物と結びつけられて思考されてきたことに着目する。

「いにしえの文化、神話、童話、迷信、無意識的思考、夢、そして神経症など、太古の思考法が支配的であったところ、ないし今なおそうでありつづけているところでは、いたるところで、金銭と糞とのきわめて密接なつながりが見いだせる」（「性格と肛門性愛」邦訳二八四頁）。

一三―一四世紀のゴシック建築の柱や壁にはおしりの穴からドゥカート金貨をひり出す「小人」の像が彫られていた[4]。金の卵を産む鶏や金貨をひり出すロバといった民話も登場する。

なぜ貨幣は排泄物と結びつけられて思考されてきたのであろうか。人間の肉体から排出される排泄物に魔術によって永遠の生命を付与したいという願望が貨幣欲望へと昇華され、肛門からひり出される金貨が価値を増殖していく過程へと転移させられるからである。幼児期において、幼児は糞便を贈り物やこどもと結びつけて表象することはしても、金銭に対する欲望を抱くことはない。だが、幼児の肛門性愛が成人になって「几帳面、倹約、強情」といった性格へと昇華されるように、排泄物にこめられた不滅の生命力への欲望が貨幣の増殖力の欲望へと昇華される。フロイトは、成人の貨幣欲望を、幼児の肛門性愛にお

ける排泄物への執着の昇華された姿としてとらえる。肉体から排出される糞便が永遠の生命を獲得する過程と、肛門からひり出される金銭がたえず価値を増殖していく過程が重ね合わされるのだ。

「肉体の中にある生命が物の上に投影されればされるほど、肉体の中の生命の影は薄くなる。そして増大する物の蓄積は肉体の中の失われた生命を示す、より完全な目盛りである」(Brown N.[1959]、邦訳三〇一頁)。

フロイトが肛門性愛と貨幣欲望の根底にみる無意識が〈死の欲動〉である。貨幣をかぎりなく増やすことに生のすべてを注ぐ生き方は、生命活動が肉体から排泄物へと昇華されることを意味する。肉体から放出された排泄物が生命力を得て自己運動するように、肉体から排出された貨幣が生命力を得て自己運動を遂げる。この不朽の生命を求める欲動は、生命活動を無機物に解消し、〈生の欲動〉を〈死の欲動〉へと還元する。無機物たる貨幣の自己増殖に生の永遠性を求める欲動は、快原理にもとづく生の充足をたえず先送りし迂回させる。この生の先送りと迂回を通して〈死の欲動〉が増殖しそれが破壊的な攻撃へと転ずるのである。

五　グローバル資本主義の推進力としての貨幣欲望の批判——ケインズの貨幣認識

それゆえ、貨幣欲望には、無機物へと回帰しようとする〈死の欲動〉が内包されている。経済学において、この〈死の欲動〉をはらんだものとしての貨幣という認識を提示したのが、ジョン・メーナード・ケインズであった。ケインズは「呪うべき黄金欲」(Keynes J.M.[1931])において、金が価値保蔵の手段として最終的に勝利を収め金本位制度がうちたてられることになった根拠をフロイトの言説に求めている。

「フロイト博士は、われわれの潜在意識の奥深くに、金がとくに強い本能を満たし、象徴として役立っている固有の理由がひそんでいると述べている。大昔にエジプトの聖職者たちが政略のためにこの黄色い金属に吹きこんだ魔性を、金はずっと一貫して少しも失わずにきた」(邦訳一九二頁)。

経済学において、貨幣は商品交換を仲立ちする道具として捉えられている。だが、貨幣にはそれ以上のものが、つまり、ひとびとの欲望や恐怖がまとわりついている。ひとびとは貨幣を、生を享受する道具として利用するのではなく、貨幣それ自体を富とみなして貨幣の獲得を自己目的として生きている。この生き方によって、ひとびとは生の享受を否定しその実現を未来へと先送りする。

この貨幣の際限なき増殖欲望が近代の時間概念を支配する。ケインズは「わが孫たちの経済的可能性」において、貨幣を自己目的とする生き方が、現在の時間をつねに未来へと先送りし、現在における生の享受を永遠の未来に葬り去る、と言う。

利子をつけて金を貸す者は「自分たちの行為の遠い将来の結果に関心」を抱く。だが、そのような関心は、「自分の行為にたいする自分の関心を将来に押し広げることによって、自分の行為にたいして見せかけだけでごまかしの不朽性を手に入れよう」（同、邦訳三九七頁）とすることにほかならない。この「ごまかしの不朽性」によって、ひとは不死の幻想を生きることになり、現在の生の享受（エロス）を放棄する。

「資本主義の力学は、〝常に延期されている未来〟に到る快楽の延期」（Brown N.[1959]、邦訳二七八頁）なのである。それは生の享受を否定して死を密かに招き寄せることを意味する。

貨幣欲望が〈死の欲動〉をはらんでいることを端的に示すために、ケインズはミダス王の説話を好んだ。ミダス王は神からすべてのものを黄金に変換する能力を授かった。だがその能力を手に入れることによって、ミダス王は自分が触れるものすべてが黄金に変わってしまうことに気づいて愕然とする。最愛の娘が、乾きや飢えを癒す飲み物や飲料水が、黄金という無機物に変質する。黄金欲望の呪いにとりつかれるとき、ひとは生のすべてを失い、死の破局を迎えることになる。

ケインズにとって貨幣を自己目的とする到富衝動は、〈死の欲動〉にとらわれ生の享受を否定して生きる精神病理的症状であり、私益のために社会を破壊する犯罪的な行為であった。

さらに、この貨幣の自己増殖に奔走するひとびとは、個体性を失って集団感染する模倣欲望にとらわれた存在となる。周知のように、ケインズは、株式市場におけるひとびとの行動様式を美人コンテストの投票行動の事例を引き合いに出して巧みに説明する。株式市場では、ひとびとは自己の理性的判断に依拠して行動するのではなく、他者の判断を見抜こうとするゲームに参加する。そして集団における平均的な判断を見抜いた者がゲームに勝利する。

ケインズよりも早く、フロイトはこのような群衆行動の心理を洞察していた。フロイトによれば、群衆は多数者の判断に自己を合わせる性向をもっており、その判断がかぎりなく感染していく傾向をもつ。将来がまったく不確実ななかで苦悩と死を避けようとする群衆は、もっとも平均的な世論を参照し、他者の欲望を模倣する。その模倣はかぎりなく感染し、群衆を特定の方向に導く。模倣だけが苦悩と死から逃れるための唯一の光だからである。

ケインズはフロイトのこの群集心理の分析を株式市場の集団心理の分析に援用した。株式市場とは、正統派経済学が唱えるように、理性的個人が自己の欲求を最大化するようにして合理

的判断を下す場ではなく、模倣欲望が感染する場である、要するに、フロイトも、ケインズも、ルネ・ジラール［1972］が人間の欲望のうちに洞察した模倣欲望の論理を先取りして提示していたことがわかる。

この模倣欲望から脱してひとびとが個体性を獲得するためには、なかば精神病理的でなかば犯罪的な貨幣欲望を克服する必要がある。模倣欲望から解放されたひとは、「明日のことなど少しも気にかけない人」であり、「この時間、この一日の高潔でじょうずな過ごし方を教示してくれる人」である。それは生活のために「物事のなかに直接のよろこびを見いだすことができる人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人」（Keynes.J.M.[1930]邦訳三九九頁）だ、とケインズは言う。貨幣欲望に呪われた株式市場の人間ではなく「野の百合」こそ個体性をはらんだ存在なのだというケインズの主張は、フロイトの欲動論を踏まえたものだということがわかる。

六　貨幣欲望によって貨幣欲望を超える

だが、ケインズは貨幣欲望を病理的で犯罪的な現象だと厳しく非難し、貨幣欲望にとりつかれた金利生活者を安楽死させ、貨幣欲望から解放された世界を望んだにもかかわらず、貨幣欲望が社会の富の増進にとって欠かすことのできないものだと主張し、貨幣欲望をいわば利用して貧困を克服し人類の自由を実現する道を構想する経済学者であった。ケインズは、フロイトと同様に、〈死の欲動〉のエネルギーを利用することによって〈生の欲動〉を昂進する道を探ろうとしたのである。その意味で、われわれはケインズの経済理論と経済政策のうちにフロイトの欲動論の経済学的展開を読み取ることができる。

ケインズにとって、貨幣欲望は資本蓄積を推進するための重要な原動力であった。貨幣欲望は極端な不平等をもたらすが、同時にそれは資本蓄積を推進することによって、社会全体の富の増進に貢献する。「平和の経済的帰結」［1919］においてケインズはこう語る。一九世紀の資本主義においては、分配の不平等が顕著で富が富者に集中したが、この富の不平等な分配と集中こそが資本の蓄積を可能にしたのだ、と。というのも、富を手にした富者は、その富を自分の享楽のために消費するのではなく蓄積に振り向けたからである。もし分配が平等に行われていたならば、すべてのひとびとが富を消費に振り向けてしまい、固定資本の蓄積などは起こらなかった。富者にパイの多くが分配されそのパイを富者が享楽ではなく投資に振り向けることによって、はじめて資本蓄積は推進される。この蓄積によって、富の不平等な分配は「社会全体の利益」（邦訳一四頁）へとつながる。

富者がパイを消費ではなく、投資に振り向ける動機は何か。

より多くの貨幣を獲得するためである。直接の快楽を求めて消費するのを禁欲してその快楽を迂回させ引き延ばして投資に振り向ける。より多くの貨幣を求める貨幣欲望は、より多くの生産を求める産業資本の投資活動に内面化される。マルクスが語るように、産業資本家とは合理的な貨幣蓄蔵者なのだ。

この貯蓄を美徳とし成長を推進する宗教倫理を提供したのがピューリタニズムであった。ピューリタンは節欲と勤勉を倫理として現世を生き、その代償として来世における神の救済を得る。

つまり、ピューリタニズムは貨幣欲望（死の欲動）を内面化する倫理である。ピューリタンは、生の享楽をつねに未来へと先送りし墓場での神の救済を信じて生きる合理的な貨幣蓄蔵者である。ケインズはピューリタニズムに支配されたヴィクトリア朝道徳を激しく批判したが、この倫理を活力とする資本蓄積によって成長を推進することこそが、未来において〈生の欲動〉を実現する道なのだ、と説く。それは貨幣欲望という〈死の欲動〉を駆動力とした成長の追求によって生存のための経済からの人間の開放を達成しようとする道であった。

資本蓄積と技術革新によって生産性の上昇が続くならば、「進歩的な諸国における生活水準は、今後一〇〇年間に現在の四倍ないし八倍の高さに達する」（「わが孫たちの経済的可能性」邦訳三九二頁）。そうすれば、ひとびとは経済的な必要に迫られて労働する時間が短縮され、生を享受するという人間の「真に恒久的な問題」（同、邦訳三九五頁）に取り組むことができるようになるであろう。

「もしケーキが、切り分けられず、…幾何級数的な比率で成長していくことが許されさえすれば、恐らく、遂にはみんなに行きわたるほど十分になり、子孫がわれわれの労働を享受しうるようになる日が到来するに違いない」（「平和の経済的帰結」邦訳一五頁）。

ケインズは貨幣欲望が〈死の欲動〉であることを熟知しながら、この〈死の欲動〉を駆動力とした経済成長の推進によって〈死の欲動〉を制御し、その成長の成果を生の享受＝エロスにつなげようと考えたのだった。

むすび

ケインズが一〇〇年後の孫たちに託したこの期待は、はたして満たされることになったのであろうか。今日進展するグローバリゼーションの破局的危機がその答えである。それは、明らかにケインズの期待を裏切っている。貨幣欲望という〈死の欲動〉（タナトス）の力を制御し利用して〈生の欲動〉（エロス）の解放をめざそうとしたケインズの思惑は外れ、その逆に、タナトスのほうがエロスを利用して猛威を振るいエロスを滅ぼし

つつある。ケインズが安楽死させようとした金利生活者は安楽死するどころか、金融派生商品の投機的取引、不動産取引を通して世界中にはびこり、産業資本家による産業利潤を遙かに上回る巨額のレントを手にしている。

トマ・ピケティ[2013]は、グローバリゼーションの時代において、株式、証券、土地、特許などの資産を保有する資産家がその資産から得られる収益を増殖させている、と語る。ピケティは、保有資産がもたらす収益の比率（資本収益率）の伸びのほうが、国民所得の伸びよりも一貫して大きい、ということを三〇〇年の資本主義の歴史のデータによって証明した。そして、この二つの伸び率の差は、二〇世紀なかばに先進諸国の経済成長が持続したために一時的に縮まったが、一九八〇年代以降、経済成長率が低下し資本収益率が上昇することによってふたたび両者の開きが大きくなっている、と指摘する。つまり、グローバリゼーションの時代は、財産保有者が不労所得の富をさらに増やす相続財産社会にほかならない。相続が優位を占める社会は、「過去が未来をむしばむ傾向を持つ」（Piketty T.[2013] 邦訳三九三頁）。資産を相続しその資産を運用してひたすらより多くの資産を獲得しようと行動する富裕階層は、ケインズが批判した貨幣欲望に呪われたひとびとであり、〈死の欲動〉にとりつかれた〈生の欲動〉によって突き動かされたひとびとにほかならない。この〈死の欲動〉のエネルギーが暴発したのが二〇〇八年のリーマン・ショックであった。

さらに、ピケティはこの過去に未来をむしばまれた社会が、能力主義によって正当化されている、と言う。個人の才能、努力、勤勉という表象によって相続財産がたえず増殖を遂げていくこの時代の富のありかたこそ、フロイトが洞察した〈死の欲動〉にとりつかれた〈生の欲動〉の二一世紀的展開にほかならない。

グローバリゼーションと世界金融危機は、ケインズが期待したような、ひとびとに経済的必要性から解放された生の享受をもたらすことはなく、その逆に、ひとびとを貧困と暴力の渦に巻き込み、ひとびとの人間関係をずたずたに切り裂いている。

フロイトの危惧がいまほど切実になったときはない。〈死の欲動〉に突き動かされた攻撃的暴力が〈生の欲動〉を圧倒して噴出するグローバル資本主義の破局的危機にどう向き合うべきか。人類は資本主義と手を切ることができるのかどうか。それは人類と地球の存亡がかかる重大な問いかけだと言っても過言ではない。

注

（1） 本論は、筆者が邦訳したフランスの経済学者ドスタレール・G／マリス・Bの『資本主義と死の欲動』（原書二〇〇九年）を参照し、それを展開したものである。本訳書の末尾に付した「訳者解説」と本稿の内容は重複するところがあることを付記しておきたい。著者の一人であるマリス・Bは、二〇一五年一月七日のシャルリー・エブド社の襲撃事件で射殺された。かれは、みずからの死によってグローバル資本主義がはらむ〈死の欲動〉の概念の証人になったかのようである。

（2） 主権国家の動揺によって、諸個人による国家に対する戦争が可能になった。「リスクの個人化」に加えて、U・ベックはこれを「戦争の個人化」[[2002] 邦訳三九頁] と呼ぶ。

（3） ノーマン・ブラウンはフロイトの排泄物が有する象徴的多義性について論じている。邦訳『エロスとタナトス』一九七頁を参照されたい。

（4） この「小人」の像の話は、挿絵とともに阿部謹也『中世の窓から』（一九八一年、朝日新聞社）でも紹介されている。

参考文献

Beck U. [1986]*RISIKOGESELLSCHAFT*, Suhrkamp Verlag. [東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局、一九九八年]

Brown N.[1959]*Life against Death : The Psychoanalytical Meaning of History*, Wesleyan University. [秋山さと子訳『エロスとタナトス』竹内書店新社、一九七〇年]

——[1999]*World Risk Sciety*, Blackwell Publishers. [山本啓訳『世界リスク社会』法政大学出版局、二〇一四年]

——[2002]*Über Terror und Krieg*, Suhrkamp Verlag. [島村賢一訳『世界リスク社会論』平凡社]

Dostaler G./Maris B., *Capitalisme et pulsion de mort*, Albin Michel, 2009. [斉藤日出治訳『資本主義と死の欲動』藤原書店、二〇一七年]

FREUD, S. [1908], Charakter und Analerotik, Sigmund Freud, Gesammelte Werke. Nachtragsband zur Auffassung de Aphasien, 1972. [道籏泰三訳「性格と肛門性愛」『フロイト全集』九、岩波書店、二〇〇七年]

——[1920], Jenseits des Lustprinzips, Sigmund Freud Gesammelte Werke, Nachtragsband zur Auffassung der Aphasien. [須藤訓任訳「快原理の彼岸」『フロイト全集』一七、岩波書店]

——[1927] Die Zukunft einer Illusion, Sigmund Freud, Gesammelte Werke, Frankfurt am Main, 1987. [高田珠樹訳

本山美彦［2008］『金融権力』岩波新書
小林敏明［2012］『フロイト講義〈死の欲動〉を読む』せりか書房
Milanovic B.［2016］*Global Inequality*, Belknap Press.［『大不平等』立木勝訳、みすず書房、二〇一七年］
Naomi K.［2007］*The Shock Doctorine*, The Metropolitan Books.［幾島幸子・村上由見子訳『ショック・ドクトリン』岩波書店、二〇一一年］
Polanyi K.［1944］*The Great Transformation*, Farrar and Rinehart.［野口建彦・栖原学訳『大転換』東洋経済新報社］
Piketty T.［2013］*Le capital au 21e siècle*, Editions Seuil.［山形浩生ほか訳『21世紀の資本』みすず書房、二〇一四年］
斉藤日出治［2017］「世界の終わりと経済学」『象』八七号
——［2017］「ケインズの自家撞着」『象』八八号
Swift J.［1726］"*Travels into Several Remote Nations of the World, in Four Parts. By Lemuel Gulliver, First a Surgeon, and then a Captain of several Ships*", 1［冨山太佳夫訳『ガリヴァー旅行記』『ユートピア旅行記叢書6』岩波書店、二〇〇二年］
「ある錯覚の未来」『フロイト全集』二〇、岩波書店］
——［1930］Das Unbehagen in der Kultur, Sigmund Freud, Gesammelte Werke, Frankfunt am Main, 1987.［嶺秀樹・高田珠樹訳「文化の中の居心地悪さ」『フロイト全集』二〇、岩波書店］
GIRARD, R.［1972］*La Violence et le sacré*, Paris, Hachette.［古田幸夫訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局、一九八二年］
Kaldor M.［1999］*New and old War*, Polity Press.［山本武彦ほか訳『新戦争論』岩波書店、二〇〇三年］
——［2003］*Global Civil Sciety*, Verso.［山本武彦ほか訳『グローバル市民社会』岩波書店、二〇〇七年］
Keynes J.M.［1919］*The Economie Consequences of the Peace*, The Collected Writings of J. M. Keynes Vol. II, Macmillan Press, 1971.［「平和の経済的帰結」『ケインズ全集』二、東洋経済新報社］
——［1930a］, *Economic possibilities for our grandchildren*, The Collected Writings of J. M. Keynes Vol. IX, Macmillan Press; 1972.［「わが孫たちの経済的可能性」『ケインズ全集』九、東洋経済新報社］
——(1931), The Collected Writings of J. M. Keynes Vol. IX, Macmillan Press, 1972.［『説得論集』『ケインズ全集』九、東洋経済新報社］